

---

# 空は示す

空風灰戸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空は示す

### 【著者名】

Z6368E

空風灰戸

### 【あらすじ】

ある日の散歩で、ふと高台のほうに行こうと考え、高台にのぼるとそこには先客がいた。双眼鏡を目にあて何かを見ているらしい。その先客に注意したところ、彼女は都会でバードウォッキングをしているのだ。

私の趣味として、自然の観察などがあげられるが、もうひとつのお趣味は散歩である。自覚こそしてはいなかつたが、我が友人である同僚である孝一が言うにはそつらしい。

とある日の日曜日。私は、趣味といわれた散歩にいつの間にやら出ていた。どうも、私は無意識に外に出る傾向があるらしい。しかし、それはもうひとつのお趣味とつなぐならば、もつてこいの趣味である。自然の観察ということは、つまり外に出なければならぬ。外に出る散歩が趣味ならば、自然の観察という趣味も一緒に果たせるのである。

その日、私は少し高台のほうに昇つてこいつと想えていた。その高台には美しい桜が咲くのだが、あまり知られていないスポットで、美しい桜を毎年独占してみることができるように場所である。私がこのときいった時期は、春でなかつたら桜を見ることはなかつたが、高台だけに町並みを一望することができ、夜になると綺麗なスポットである。

そうはいつても、私は夜景には興味がない。ただ私は、その場所の木々をみようと行つただけだったのである。

一百段もある階段を上ると、そこには珍しいことに先客がいた。この場所は前述したとおり一百段もあるから、あまり人は来ず、いつも閑散としているのである。

どうやらその先客は、目に双眼鏡を当てているらしい。その双眼鏡で周りを見ているのだ。しかし、ここで見えるとなるものは、ビルばかりで特に見えるものはないのだが。私は、そのとき盗撮か何かをしているのかと考えた。ビルの中を双眼鏡でみるのは、ここではたわいもないことだろう。

「何をしていらっしゃるんですか？」私は先客の側に近づき、話しかけた。

その先客はびっくりともせず、ゆっくりと田から双眼鏡を下ろしおちに振り向いた。

それは若い女性だつた。綺麗な顔立ちをしており、そばかすなどとこうものはまったく見当たらない。身長は、百五十五センチより大きいぐらいで、肩にまで髪がかかっている。

「何をしていらっしゃるんですか?」私はもう一度言った。

「バードウォッチングですよ」と女性は答えた。

「バードウォッチング?」私は鸚鵡返しした。「こんなところだ、バードウォッチングができるんですか?」

「できますよ。鳥がいる場所でなら、どこでもできなことがあります

ません」

「しかし、こんなところでバードウォッチングをしなくてもいいでしょ?」私は指摘した。

「時間があるときは、いつももつといいところへ行っているんですが、今日は時間がないので、都会の鳥を観察してるんです」

私は女性が先ほどまでみていた場所をみた。確かに、鳥は飛んでいる。だが、少数だ。

「いますでしょ?」と女性は言つた。「鳩などはここで観察するのが一番なんですよ。ここは高台ですから」

「しかし、こんなところでしなくてもいいでしょ?」

「いえ、東京の街中ではここが一番いいところなんですよ。あまり知られていらない場所ですから、ゆっくりと観察することができます」確かにそれはそうだ、と私は納得した。それに、この女性の言葉には裏といふものが感じ取れなかつた。言葉は丁寧に話すし、しさかも同様していない。もし悪いことをしているとき、他人に話しかければ動搖するのが常であろう。それが、彼女にはないのだ。

私は彼女に、私が知つている限りの鳥の知識を質問してみた。バードウォッチャーならば、鳥についての知識はあるだろ?と考へて質問したのであるが、それをその女性は軽々と答えていった。ついに、私の知識が底を尽きたとき、彼女は質問に対しても全問正解して

いたのである。そのとき、私が勘違いであることを悟った。

私は事情を説明し、彼女に謝ると彼女は言った。

「いいんですよ。わたしも紛らわしいことをしていたのですし、あなたが悪いわけじゃありませんから」

「しかし、ここでバードウォッチングできるとは知りませんでしたね」と私は言った。

「私は何度もここに足を運んできていたんです  
が」

「ここには春以外には、ほとんどの方がいらっしゃりませんから」

「おや、あなたもここが桜のスポットとこなことをご存知ですか？」

私は驚き聞き返した。

「はい。昔、春にここに来たことがあって、そのとき知ったんです  
「そうでしたか。いやはや、ここはほとんど知られていらない桜の名  
スポットでしてね。春にはゆっくり桜が見える場所なんですよ。よ  
かつたら、春にでもいらしてくださいな」

「はい。ぜひ、そうさせていただきます」

「まあ、今年の開花がいつ頃になるかはわかりませんが。昨年は、  
結局咲きませんでしたから。でも、今年の予測だと咲くだろうとい  
う話ですけどね」

「あら、そのような情報がもう公開されているのですか？　わたし、  
初耳です」

彼女は私の言葉に引っかかりを感じたらしく、私は、気象庁員で  
ある旨を告げると、いささか驚いていたようだつた。

「そうだったんですね。驚きました」

「特に身分を隠すつもりはなかつたんですが、まあ、私みたいな人  
間は珍しいみたいですからね」

「いえ、そういうつもりでいつたわけでは…………」

私は多少気まずくなり始めていたので、別の話題をふつた。その  
話題というのは、結局私の自然観察という趣味に基づいたものだつ  
たが、彼女はそれを理解し熱心に聴いていた。話題によつては、論  
じ合つ部分もあり、彼女とはいつしか意気投合してきていた。

話題も尽きなかつたが、彼女はそろそろ帰らなければ、というの  
で話は打ち切りとなつた。

「失礼ですが」と別れ際彼女は言つた。「あなたのお名前を伺つて  
もよろしいでしょうか?」

「月島といいます」と私は言つた。「月島琢志です」

「月島さんですね。私は、みなみば南場ななといいます。また、こっちに来  
るとき、会えましたらお話しましょ」

彼女はそりやつて、辞去した。

それから何日もたつた日、私は孝一とたわいもない話をしている  
と、ふつと最近の異常気象についての話題に移り変わつた。

「ああ、前にあつた豪雨か」とこういつたのは私である。「あれは  
ひどかつたな。確かに、予報に出なかつた謎の雨だつたよな?」

「そうさ」と孝一。「あんな雨が降るなんて……と、大分驚いてた  
よ。まあ、おれも驚いたけどな」

「そりやあ、そだらうな。今まで、こんなことはなかつたわけだ  
し」

「いや、確かに初めてじゃなかつたと思うぞ」孝一は指摘した。「ほ  
かにも何件かあつたはずだ。まあ、どこであつたかは思いだせない  
が。それでも、大雪や大型台風に見舞われたのは確かさ」

豪雨……大雪……大型台風。これらの異常気象は、前線を調べれ  
ばわかることであるから、予報が出されないとということはありえない。  
しかし、調べていたにもかかわらずまったく予期していなかつ  
た気象が起こつたのである。それも、大型の……。

このご時勢であるから、気象は完全な機械で行われているのはご  
存知であると思う。私はまだ三十で年老いてはいないが、老人たち  
の言葉を借りたいと思う。つまり、機械などあてにならない、だ。

私は、庁でも影の薄い いわゆる窓際部署に近いところにいる  
人間である。暇なことが多い人間である私は、よく空を見上げる。  
空には、雲があり青空が広がり、また夜になれば、星が輝きだす。

煙や、熱や、水蒸気やは、みな空に飲み込まれていぐ。空にはさまざまなことが起こるのである。そこから、何か読みとれやしないか、と思つのである。

よく、地震雲などとこゝものがあるとこゝとを聞くが、それの真偽がどうにせよ、空には、私たちに何かを知らせよつとしていることがある、と私は考へてゐる。一度だけ、とある雲を見て、今度雨が降るであろうと予測したことがあるのだが、そのときの予報ではまったく雨の予報はなかつたが、雨が降つた。

私はそのとき思つた。機械は、人間は、自然の摂理にはかなわぬ、と。

この週末の天気は良好です。……そんな予報がされていた週末の天気は最低だつた。雨は降るわ、雪は降るわ、わんさかわんさかである。その週末、私は特にどこにいくこともなかつたから、散歩にでも行こうと考えていたのにも、かかわらずこの状態ではまったく外に出る気は起きない。しかし、家にいてもまったくやることのない私は、ついに重たい足を動かして外へ出た。

外は冷たかつた。雪といふのは、小粒程度でたいして降つてはいなかつたので、それほど寒くはなかつたが、雨は降つてるのでそれなりには寒い。名につけの防寒をして、私は雨の日の散歩に出了かけた。

このよつこ、私は雨の日でも散歩に出ることがある。それは、太陽が照つているときはまた違つて、自然の世界に行けるといふ楽しみもあるからである。ただ、冬は寒い。これだけが難点だ。

私は、ふつとある場所で足を止めた。それは例の桜のスポットへと続く階段がありところである。私はあの女性、南場ななという名の女性がいるであろうか？と思ひ、一百段ある階段を上り始めた。女性にモテない私であるから弁明をするが、決して彼女が目当てではなく、その他の要因、討論など、をしたいと思つていつただけである。

そこに彼女はいた。

「寒いですね」と私は声をかけた。

彼女は振り向くと、すぐに私だと気づいたらしく。そうですね、と返してきた。

「こんな日に鳥は観察できますか？」

「いいえ、あまり見かけませんね」と彼女のは答えた。「でも、まあ、家にいてもやることがありますので、ここに来るほかないのです」

「こんなに寒いのに大丈夫ですか？」

「私も月島さんと同じように、ちゃんと防寒していますから大丈夫です。ところで、月島さん。月島さんは、動物が危険を察知すると、その場から逃げ出すということを信じていますか？」

その質問はあまりに唐突だったので、私はいささか面食らつたが、信じていると答えた。

「では、鳥もその分類に入るとお考えでしょつか？」

「鳥？いや、鳥はどうでしょ？しかし、動物であることには変わりないので、入るんでしょうな？」

「私は入ると固く信じています」と彼女は冷静にいった。「月島さんは、前にあつた東京での予想外の豪雨を覚えていらっしゃいますか？」

「予想外の豪雨とは、今年の六月にあつた何件か床上浸水したあの豪雨ですか？」

「はい。あのとき、私はたまたま東京から離れていたのですが、私その豪雨が始まる前に、その東京でないとこから見たんです。鳥たちが、西に移動して行くのを。しかも、それまでまったく鳥が観察できなかつたのに」

「まさか、あの鳥の大移動のニュースじゃないでしょうね？」

「それです。私はそれを目の当たりにしたんですよ。それをみたのは私だけではなくて、私の知人も見たのですが、その方と論じた結果は『何かの予兆』でした。そして、その予兆が起きたのが、東京

でのあの豪雨でした」

「それで？」私はその意図がわからなかつたので、続きを促した。

「私は先週見たんですよ。鳥たちが、東京から離れて行くのを……

……」

その言葉に私は、言葉を発するのが詰まつてしまつた。この話の流れからの、この告白はつまり悪い予兆であるということを示していることは、私にでも読み取れる。ということは、また何かしら悪い予兆がおこるのであらうか？ しかし、庁での予報ではまったくそんなものは観測されていないし、予報なんて出されていはしない。「つまり」と私はいつた。「何か、悪いことが起きるといつんですか？」

「もしかしたらそうかもしません」と彼女は答えた。「今日のこの天気も、予報外ですから。何かあるかもしませんね。残念ながら、私にはそれが何かはわかりません」

私は空を見上げた。空は、厚い雲に包まれ、太陽光は通さないといつているかの如く見え、また、大雨を降らしてやるぞ、と意気込んでいるように私は見えた。それ以外のことはまったくわからない。ただ、いやな予感がするばかりであつた。

そして、そのいやな予感は、翌週に入つてついに起つたのである。昨年六月の豪雨の襲来である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6368e/>

---

空は示す

2010年10月8日15時12分発行